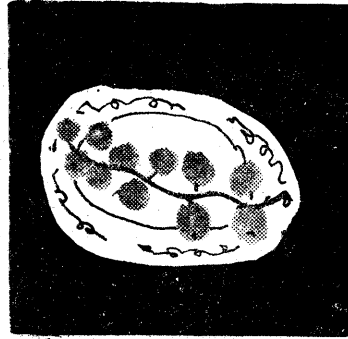


## 教育評価の基本問題



小口忠彦

題目は教育評価の基本問題であるが、おそらくこの問題は今までに聞いたり読んだりしたものにつながりがあるだろうと思う。しかし、基本的な問題であることは疑いないので、説明したいと思う。私は、教育評価という領域を、教育の場から離して、単なる理論としてあつかおうというのではなく、あくまでも我々の身辺に広がっている現実とのつながりの内できちんと考えてみたいと考える。

私自身、最近、或る教科書会社の小学校理科の一年から六年までの教材を、一單元ずつ心理学的に検討しているが、こういう仕事をする際には、いやでも現実を考えずにはいられない。

また、教育相談をしていると、親が自分の子どものように観ているか、という点について、ほっとはおけない問題を感じるのである。

る。

しからは、現実在即して何を問題としてとりあげたらよいか。ことばづかいは抽象的であるが、《程度の差》をとりあげたい。一般的にいえば《質と量》の問題である。質は、量のうえにのっかっている。実は、質が決められる場合、質のさかい目はほんの程度の差であるが、程度の差にそんなにのっかしたものではない。

理解しやすい例として、入学試験の場合をあげてみよう。あるところをさかい目にして合格と不合格とに分ける。そうすると、合格不合格という質が決められる。しかし、その質が何に依って決められたかという点、点数の量である。量としては、程度の差でつながっているのに、質としては、真二つに断ち切られる。また、男女の問題を例にとってみる。この人は男、あの人は女、というように質で分ける。しかし、心理学的にいくつかのエレメントをえらびだし、これらのエレメントを通じて男女の差をつけようすると、量の問題になる。

ねたみは、女にだけあって、男にはないというのではなく、男は女に比して少ないとおもわれているだけのことだ。量的には、《程度の差》にすぎないのである。

男と女と、どちらが子供を可愛いがるかをみても、要するに程度の差にすぎない。

この《程度の差》ということが、現実の生活の場において、案外なところでいたずらをしてはいないかという点を問題にとりあげたいと思う。

終戦後、アメリカの教育評価の影響を大きくうけたが、よく吟味

してみると、どこの国にしても、教育評価ということが簡単にできるものではない。教育評価という言葉には価値観がふくまれている。だからこそ、子どもの将来への役立てにつながるのである。ところが、ある先生は、知能検査をすることを教育評価だと思いつているが、これは間違いである。未来の相のもとに現在をみることでできるのではなくては、教育評価にはなっていないことを知らなければならぬのであって、幼児の場合でいえば、少くとも児童期とのつながりのもとに観ていなければならない。

しかし、アメリカの書物などみても、人間の発達段階は、それほどはっきりしているわけではない。これは、環境の影響が非常に大きいからである。幼児期にはそれほど香ばしくなかったのに、青年期になったらよくなったというような現象は、決してまれではない。教育評価がもっとすっきりとしたものになり、安心して評価できるためには、発達心理学がもっと充実してこなければならぬのである。

それでも教育評価は、しだいに成長し、《測定》の段階から《診断の段階にまで達している。診断と評価とを混同することは正しくないが、それにしても、診断の段階にまで達したことは認められなければならないだろう。しかし、その診断が、現実の要求をみたすためには、必ずしも十分でないことも認めなければならない。はやいはなしが、実際になると、指導要録と指導とは、なかなかうまくつながらないはずである。

ところが皮肉なことに、教育評価なる行為が、妙なところで、指導につながっていることがある。これは、我々のあずかっている子

供の親が、わが子をどのように観ているかということに関連している。親は、先生とはちがった意味で、わが子に真剣である。心理学的にいえば、人間は真剣になる程気もちが単純になる。アタマについても、性格についても、健康についても、《いにかわるいか》というように、ものごとを単純に割り切って考えたがるものである。だが、彼らの感じ方なり考え方なりが単純になる理由は、他にもある。

現実の社会では、ものごとを割り切りたがる。割り切らざるをえない場合が多い。たとえば、子供に入学試験を受けさせるとする。合格するかしないかの何れかで、その中間はない。また、たとえば世間の人たちが子供についての批評をする。その子の性格を、いとかわるいとか決めつける。その中間をのこしておかない。中間をのこしておく余裕がないのである。このように二つに割り切ってしまう観方を《二値の論理》とよぶ。このみ方は量的に表現しているのでなく、質的に表現しているのである。我々も、先生という衣を脱いで、親という衣に着かえれば、二値の論理へとびこむかもしれない。

世間をつらぬいている二値の論理のあたりをうければ、親がわが子を見る場合、いいわるいの何れかに割り切りたがり、その中間にアグラをかいているという気もちに安じられないのも、理解できないことではない。学校や幼稚園で、先生がいいわるいという二値に区分して、家庭へ連絡をつけるとしたら、親には納得がいくにちがいない。

しかし、先生達は、二値の論理にはしたがわれない。あえて、二値

を避け、量的に表現しようとする。だが、この《多値の論理》にも問題がある。例えば、知能検査をやると、量的に表現できる。この量的表現は、なる程、わり切つてはいないが、小刻み過ぎるおそれがある。知能偏差値の58と60との差が重大にみえる。しかし、知能検査にしてみても、現在の段階では十分ではない。

本当に科学的段階に達しているならば、小刻みにみてもさしつかえないだろうが、現在のところでは危険だと思ふ。実は、それどころではない。もし、 $A \cdot B \cdot C$ 、という三つの段階に分けるとすれば、ずっと刻みが大きくなってくるが、うかつにしていると、連絡された親のほうでは、勝手にBをAのほうへ一しよにしたり、あるいはCのほうへ一しよにしたりする傾向がある。そして、それが、子どもの指導に、よくない意味でつながるのである。

そこで、こういうことは考えられないだろうか。知能検査の場合に限らず、記録としては $A \cdot B \cdot C$ の三段階に区分するとしても、これをどのようにみるかという点では、《はっきりしているもの》と《はっきりしないもの》との二つに区分するのである。 $A \cdot B \cdot C$ の場合でいうと、指導要録の《特に》という文字に留意して、Aはどこからみてははっきりいいもの、また、Cは、どこからみてもはっきりと問題をふくんでいるもの、いいかえれば、AとCとは、環境の影響をたやすくはうけない程度にはっきりしているものに限定し、この他はすべてBとして統括する。そして、Bについては、環境の影きょうをうけ易いという意味で《可能性》をふくませ、性急に小刻みに観ない方がよくはないだろうか。量を質に転換させる場合には、大刻みのほうが危険が少いと思ふ。

このようにするとしたら、記録としては多値的であっても、観かたとしては二値的であり、現実的に、親の観方に近接していて好都合であるし、親としては、Bを勝手にAのほうへひつつけたり、Cのほうへひつつけたりすることができなくなりはしないだろうか。

我々は教育に理想をもっているが、この理想が現実の力におし流されるようでは困る。といって、親の考え方を現在のままにしておくのもよくない。徐々に修正していくより仕方あるまいと思われ

る。我々にとっては、どのような観方のうえにたつて、どのように記録をとっていくかが問題なのだ。

この問題を解決する際の注意を指てきたつもりであるが、さらにいうと、《質と量との混合》を避けたいのである。その一つは人情に訴えて、BをAにしてやりたい。CをBにしてやりたい、といった気もちを捨てなければならぬ。第二には、Aには何人、Bには何人、Cには何人と、Bを中心にして左右同形になるように機械的に分配することをさけたいとおもう。

以上で、私のお話したいと思うことは大体つきている。現実を眺めて、考え直してみなければならぬことが多いように思ふ。現実をもっと考えて頂きたいのである。

(お茶の水大助教授)